

まえがき

本書はリウマチ膠原病診療に携わる医師を対象としている。リウマチ専門医の数は限られており、リウマチ治療薬の使い方について知りたいという声も多く、非専門医もリウマチ患者の治療・フォローに迫られている場面も多いことから、本書を企画することとなった。すぐに専門医と話し合いができる環境にない先生方にとっても、どのように治療薬を使い分けていくのか、具体的な場面でどのような選択肢を考えるのか、添付文書からは読みとりにくい具体的な実際の使用方法、患者さんへの説明のしかた、など実臨床で使いやすいようにわかりやすく記載いただいた。

高齢化を背景としてリウマチ疾患の数も増加しており、その診断と治療の過程においては、複雑な病態を理解するのみならず、患者の複合的要因にも配慮しながら、適切な治療を選択する必要がある。例えば、70歳新規発症の関節リウマチで高疾患活動性であり、間質性肺炎およびB型肝炎既感染を合併している場合、どのような治療が可能なのだろうか。あるいは、妊娠を希望している活動性の高い関節リウマチ患者ではどのような薬剤を選択すればいいのだろうか。

また、リウマチ膠原病の治療薬はたくさんあり、新旧が混在している。副腎皮質ステロイドをはじめメトトレキサートなど長期にわたって使用されてきた薬剤は現在でも重要な位置を占め、実際の使用法や副作用について熟知していなければならない。さらに、生物学的製剤やtargeted synthetic DMARDsが登場し、リウマチ診療も大きく前進したが、これらの薬剤についても、各薬剤別に使用法や違いを知っていることが必要となる。

年々、新たな薬剤が使用できるようになり、関節リウマチをはじめとした各治療推奨（ガイドライン）にはこれらの薬剤をどのように使用していくかが盛り込まれている。その内容は数年ごとに更新されており、各薬剤の基本的な内容を理解しておくことが前提となっている。

本書は大きく4章構成となる。第1章では代表的疾患の関節リウマチや脊椎関節炎のEULAR治療推奨を理解する。第2、3章は治療薬の各論であり、また関連して治療することの多い骨粗鬆症治療についても言及している。第4章では患者背景に応じた治療として、MTX困難例、背景リスクのある患者、妊娠・高齢などに応じた治療を述べ、具体的な臨床場面で遭遇しうる内容を網羅しているのが特徴である。

各執筆者はリウマチ膠原病診療に造詣の深い先生方であり、各薬剤の特徴のみならず最近の見解も含めて記載いただいている。

本書がリウマチ膠原病診療に携わる医師にとって、臨床現場で一助となることを祈念する。

2020年8月

沖縄県立中部病院リウマチ膠原病科
金城光代